

慢性腎臓病

定期健康診断と

慢性腎臓病(CKD)

学校や職場、または自治体での定期健診(検診)を受ける機会が多くの方が持っていると思います。その中で検尿での蛋白尿や血尿、血液検査でのクレアチニン高値、または超音波検査での腎臓の形態異常などを2回以上にわたって指摘された方は慢性腎臓病(CKD)に当たると考えられます。腎機能からは血清クレアチニンから推測した糸球体濾過量(GFR)が60ml/分/1.73m²未満の状態が3ヶ月以上続く場合をCKDと定義しています。

加齢による腎機能低下により、高齢者の方ほどCKDの割合が高くはなるのですが、また若い方、働き盛りの方がCKDといわれた場合には注意が必要です。これは生命予後の長い人ほど生存中に腎不全をきたす割合が高くなるからです。

腎不全は別名、尿毒症ともいいます。腎機能が低下することにより、倦怠感、食欲低下、腎性貧血、高血圧症などの症状を起します。

「心腎連関」という言葉があります。これは心血管疾患とCKDが相互に因果関係を持っているということを指します。すなわち、CKDを持っている方は虚血性心疾患や脳梗塞などを経時的に発症する率が高く、高血圧症や動脈硬化がCKDの発症リスクとなるということです。また現代におけるCKDの増加には高脂肪食、運動不足、飲酒、喫煙、ストレスなどの生活習慣の悪化、肥満やインスリン抵抗性が関与しているといわれています。

CKDはメタボリック症候群や糖尿病の兄弟疾患ともいえるでしょう。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

医学博士 安永 親生